

# 日本伝存漢籍の中国還流の研究

## —— 七経孟子考文補遺と佚存叢書小考 ——

大庭 脩

皇學館大学

中国で佚亡した書籍が日本には残っていて、それが中国へ逆輸入される現象は、江戸時代には少なからずあり、さらに明治に入って盛んに行われた。

ここでは、七経孟子考文並補遺と、佚存叢書について、些少な考証を行って発表の責を果したい。

日本から中国へ運ばれた七経孟子考文並補遺は、やがて嘉慶二年（1797、寛政九）に阮元によって更に考訂を加えられた上、中国で刊行される。

四庫全書新收日本人山井鼎所撰七経孟子考文并物観補遺共二百卷元在京師僅見寫本及奉使浙江見揚州江氏隨月讀書樓所藏乃日本元板落紙印本攜至杭州校閱經羣頗多同異

上に提示したのはその阮元の序の最初の部分であるが、その記すところによれば、阮元は浙江学政になる以前、京師に居た時からこの書は見ていたが、それは写本であった。後に述べるように、日本から写本が輸入されたとは考えにくいので、この写本は中国で作られた写本であると考えられる。

ところが、浙江へ赴任する途中で、揚州において江氏隨月讀書樓に所蔵する日本の元板落紙印本を見、携えて杭州へ来て校閲したという。

隨月讀書樓とは、江春という人の蔵書で、字は顥長、号は鶴亭、安徽歙県の人で、康熙六十年に生まれ、乾隆五十四年に死んだ。歙県から揚州へ移り、始めは官に仕えたが、後揚州の大商人になったという人物、まさしく典型的な新安商人で、揚州へ移った塩商であり、長崎貿易の荷主にもなり得る地位に居たと考えられるから、この人の蔵書の中に日本の原刊本があって不思議ではない。

次に落紙印本とは何かということであるが、これについては大田南畝の一話一言卷二二に考証があり、落紙は美濃の十文字紙であることは疑いないと言い、ただ十文字紙をなぜ落紙と言ったのかは詳らかではないとし、それについて考証をしている。

その帰するところは、拾遺記に、側理紙というものがある、南人が海苔を以て紙を為るが、その理が縦横邪側でそれで名前となったという記事があるので、十文字紙が側理紙に似ているので落紙と言ったのかというものである。

大田南畝の考証は、なぜ落紙と名付けたかという点にあるが、甚だ印象に残ることは、七経孟子考文補遺の元本は美濃の十文字紙に摺ったという点は毫末も疑っていない、既定のこととして考証を始めていることである。「享保の御時にこの書を美濃の十文字紙に摺て渡されれば、十文字をさして落紙といへるは疑なき事なれども」という記述は、大田南畝の常識として、徳川吉宗の時にそういうことがあったとされている常識を示す。

伊豫西条の臣山井鼎が、足利学校にある古写本、宋刊本等を用いて七経と孟子を校定したことは申すまでもないが、享保十三年五月に老中松平乗<sup>のりきと</sup>邑の申し渡しがあつて西条侯松平頼渡は鼎の考文一通を献上し、この秋から吉宗の命によって、荻生北溪が、徂徠門下の石川之清、三浦義質、木村晟、宇佐美濃水の協力のもとに再校を行い、歳末にいたって業を終えた<sup>(1)</sup>。そこで吉宗はその刊行を命じたが、書物屋が集まって評議の結果、版下彫立の費用が五百両に及ぶので半金を公儀より支給されたいと願い出、許されて作業にかかり、享保十六年十二月にできた。売本百十部、一部32冊、代銀45匁で売った<sup>(2)</sup>。天明六年(1786)、日下部高秀が足利を訪れた時の『山吹日記』に

其後美濃国にて物する紙を、殊更に十文字にすかせ玉ひ、それによりて細井広沢に仰せて、其箱うは書を物して瓊浦より清朝に渡し遣しめ玉ひけるとぞとあり、美濃の十文字紙のことの別証を得る。ただこれは、中国へ出すコピーのみを別製品にした意味かどうかは疑問が残る<sup>(3)</sup>。

そして享保十七年正月、長崎奉行に対し、中国へも売り広めよとの命があり、おそらく十七年三月二十六日-二十八日の間に帰航した亥一番から五番船あたりが積んで帰ったのが始めであろう。また覆刻知不足齋叢書古文孝経の大塩良の跋文に、この太宰春台の古文孝経を、享保十六年に刊行した「後数年、又聞く、估客伊孚九長崎に乞い、古文孝経及び七経孟子考文各五六通を購得して帰る」という文があり、恐らく伊孚九が享保十八年丑七番船船頭として来航し、十九年十二月に帰帆した時の話であろう<sup>(4)</sup>。

四庫全書の中に入った七経孟子考文補遺は、浙江省第四次汪啓淑家呈送書目、全五二四種の中の一つとして献上されているが、このコピーは、霍灝が『四書考異總考』の中で同書の解題をしているところに、

乾隆辛巳の年(二十六年、一七六一、宝暦十一)に劫瀬杭世駿先生を通じて汪氏からこの本を借りて見た。

と記しているので、汪氏飛鴻堂には少なくともそれ以前に架蔵されたものである。

つぎに林述斎が行った佚存叢書について、これまた大田南畝『一話一言』巻二十二に引用する文書について述べる。

書面林大学頭承付之通被仰渡候旨承知仕候。午九月十二日 中川飛驒守

伺之通被仰渡承知仕候。九月四日

唐土之亡書叢書取立可申目

林大学頭

漢孔安国伝古文孝経古本

梁李暹注千字文

隋蕭吉五行大義

唐許敬宗文館詞林

唐李嶠百二十詠

唐武后臣軌

唐武后樂書要録

唐韋述兩京新記

唐李瀚蒙求本注

宋李中正泰軒易伝

宋蔡模注朱子感興詩

元許衡魯齋心法

元辛文房唐才子伝

右兼而取集置唐土亡び候段、急と証故有之候品々にて粗校合も仕置候間、直に取立候ても都合相調可申分先前書之通に御座候。尤此余も彼是心当たりも御座候得共、弥亡書に相違無之所、未だ屹と証故を見出し不申候分は此度不申上候。右書面之品々にても、一集を五百枚位に定、十冊綴之書物に

取立候得共、大抵四集位にも相成可申候哉に奉存候。以上

午三月

林大学頭

右攝津守殿近藤吉左衛門を以會計府中に下して議せしめし時の本紙のうつし也。

この文書は日付が三ヶ所にあり、第一行、午九月十二日、第二行九月四日、後より二行目に午九月とあり、それぞれで三部分よりなるほか、最後の行は大田南畝のこの文書に関する憶え書である。

憶え書にある攝津守殿は、堀田攝津守正敦で、寛政二年（1790）六月十日より、天保三年（1832）一月二十五日まで若年寄であった人物、會計府とは勘定奉行所である。林大学頭の本文は、午三月付で中国で亡失した書物を集めようとし、その原案を書き著したもので、すなわち佚存叢書の計画案である。佚存叢書は全六帙で、第一帙は寛政十一年（1799）に出版されたから、ここにいう午はそれ以前である。そうするとこれは、前年の寛政十年戊午の年と推定できる。従って、述斎は三月にこの伺書を提出し、九月四日に其の通りやるように、仰せわたされた。そのことを九月十二日付で中川飛驒守が承知したというのが第一行である。

中川飛驒守は忠英、三河の人、宝暦三年（1753）に生まれ、明和三年（1767）父忠易の遺跡千石をつぎ、小普請組支配組頭を経て天明八年（1788）九月から御目付になった。当時はなお勘三郎を称し、号は駿台である。彼が御目付を勤めている間に学問吟味の実施案作成と、寛政三年（1791）その実施の達しを出し、四年九月に第一回、六年に第二回が行われた。その間寛政五年（1793）四月に美濃国岩村藩主松平乗<sup>もり</sup>蘊の第三子衡が林家の養子となり十二月に大学頭となった。すなわち林述斎である。

中川忠英は寛政七年二月五日長崎奉行となり、飛驒守となる。同年六月、先の五年の学問吟味に丙科に合格した近藤重蔵は長崎奉行手付として長崎に在勤、ここで作られたのが『清俗紀聞』であり、中川忠英作といわれる『舶載書目通覧』が出現する。ついで寛政九年二月十二日付をもって忠英は御勘定奉行、六月関東郡代を兼帯する。同年十二月、近藤重蔵は関東郡代附に転ずる<sup>(5)</sup>。

中国事情にも関心のあり、舶載書にも関心のある中川忠英が勘定奉行であったことは、佚存叢書の出版には極めてよい理解者をもったことになる。そして『一話一言』に残された文書は、この出版に幕府が財政的支援をしたことを意味するものと考えられる。

かくのごとくして、佚存書の中国への還流に大きな業績となった『七経孟子考文並補遺』も、『佚存叢書』も、幕府の支援のもとに行われたことが明らかである。

注

- (1) 荻生北溪に関しては、『享保時代の日中関係資料三（荻生北溪集）』一九九五・三 関西大学出版部刊 に詳細に伝記、業績を考証してあるから、ついて見られたい。
- (2) この出版事情については、森銑三 山井鼎とその七経孟子考文『森銑三著作集 第八巻』所収一九八九・五 中央公論社刊 に詳しい。原文は『東洋文化』昭和八年八・九月両号にある。
- (3) 神宮文庫所蔵の享保十六年刊『七経孟子考文並補遺』を検するに、用紙は十文字紙というような特殊なものではないから、中国へ送るものを別製品の紙に刷らせたと理解する方が良い。
- (4) この大塩良の跋文については、狩野直喜 山井鼎と七経孟子考文補遺『支那学文叢』一九二七・三 弘文堂書房刊による。天明元年刊の『鰈刻清鮑長塘知不足齋叢書第一集古文孝経序跋』嘉善堂蔵版にはこの跋がない。  
また、『七経孟子考文並補遺』ができて、初めて刻本ができるので、『七経孟子考文』は写本のみの存在で、刊本はない。日本から中国へ舶載したものは『七経孟子考文並補遺』の刊本だけと考えるのを原則としたい。他は具体例をまつ。
- (5) 中川忠英の略伝及び近藤重蔵との関係は、大庭脩『漢籍輸入の文化史－聖徳太子から吉宗へ－』一九九七・一 研文出版刊の10 大学頭と長崎奉行 に詳しい。